

## ちいさな証

## 三つの奇跡

松林幸二郎

スイス日本語福音キリスト教会



この春夫婦で里帰りをしました。私にとっては兄の“四十九日”に出て以来の3年振り、妻にとっては26年振りの日本の春でした。88歳になった母が昨年11月末に带状疱疹にかかり、もう母は長くはないだろうから急いで帰国するようにと友人がしきりに忠告してきました。ちょうど真冬のその頃、私達が住んでいるスイスの古い農家は雪かきや薪暖房で仕事となり、肩を痛めている妻には任せられず、また定年後に週一日だけグループホームの作業所で勤務していた私には、その他に家族に対する責任や教会の奉仕があり、おいそれとは帰国できない状態でした。

## 奇跡その1.

私は、主なる神に導きと母の癒しを祈り続けました。2月になると、母の家の二階に住む叔母や、故郷の友人達の心のこもった励ましや真心をこめて作られた手料理に加え、私達や娘達の祈りが神様に聴かれ、寝たきりであった母が立ち上がり、室内から戸外まで歩けるようになったのです。誠に愛は力で、これらの愛が母に注がれなかったら、自力で立ち上がり歩こうとする気力はきっと萎えていたに違いありません。90歳近い母は、さすがに体力は衰えていましたが、しっかりと両脚で立ち戸口まで出迎えてくれ、気丈夫な姿はそのままでした。もう生きて会う事もないのではと覚悟をしていたので、神様による奇跡を目の当たりにして涙を抑える事ができませんでした。

恵み深い主は更に、時を同じくして友人と日本旅行中の末娘に彼女の大好きな祖母との温泉での一日と、その後の一週間も好天のもと、私たち夫婦と彼女らとの九州旅行を豊かに祝福してくださいました。感謝。

## 奇跡その2.

私達の帰国3日前になって、いつも宿舎を始め様々な配慮をしてくれていた母教会の兄弟からメールが入りました。廉価で交通の便も良く、いつも里帰りの際に定宿にしていたカトリック教会の宿泊施設が、非耐震構造であるため、宿泊客の受け入れを禁止されたとの知らせでした。そこで、広い人脈がある国立大学の教授をしている旧友なら、心当たりがあるだろうと尋ねてみました。しかし、そのように急な話は到底無理で3ヶ月はいるとのことでした。40年前の世界放浪時代なら橋の下で寝る事もいとわなかったけれど、今はそういう訳にもいきません。

しかし、祈りの内に不安は拭われていき、どんな方法でかは分からないけれど、主は必ず住まいを備えて下さるという確信が与えられ、平安な思いでした。一間きりの母の家でも、いつもはWIFIに繋がったので、津のような田舎町でもウィクリーマンションでもあるのではとスイッチを入れたのですが、全く繋がりませんでした。そこで思いついたのが一軒先のNさんでした。Nさんは兄の中学の同級生で、6年前にスイスの我が家を訪問された時、精一杯のおもてなしをしたのですが、多趣味でお忙しくそれ以来疎遠になっていました。しかし、その日はちょうど外国から戻られたばかりで在宅されていて、一緒に宿泊できそうな場所を探そうとしましたが、どうしてもインターネットに繋がりませんでした。



そうしている間に、Nさんがふっと近くのヨットハーバーのマネージャーをしている友人を思い出したのです。この方は母の家から歩いて数分のところに2軒家を持っているので尋ねてみると、どうか自由に使って下さいという信じられないようなお返事でした。ここで2度目の奇跡を見せて頂きました。それから2週間、午前と午後、歩いて数分のところに滞在し、母を訪ねる幸いを得ました。共に歩いて近くのレストランに食事に出掛ける事も出来、寝たきりの母を病院に見舞うことも覚悟していた私は、イエス様に幾度感謝したことでしょう。

## 奇跡その3.

主は母の周りに、毎日二度、散歩がてら様子を診に来てくれる家庭医と、週に二度、母と叔母を訪れるマッサージ師の友人を備えて下さいました。遠く離れて欧州に住み、すぐには帰れぬ、帰ったところで余り役に立つとは思えぬ私にとって、それは感謝なことでしたが、これから更に老いゆく母にどうすれば良いのか、解決策を見出すことができずにいました。

私達が奥多摩にいる田辺先生ご夫妻を訪ね旧交を温めていた頃、重い糖尿病の兄を長年看護してきた義姉が母と叔母を訪ねていました。義姉は兄の死後、グループホームで介護士として働いていたのを辞めて、立川から母と叔母の近くに引っ越し、二人の老後を見る決心をしてくれたのです。これも私にとっては奇跡としか思えませんでした。一ヶ月という短期間に、私達は3度の奇跡を体験させられ、愛をお示し下さった主なる神様に更なる深い信頼と感謝を持って歩みたいと願う日々です。

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

マタイ 6: 33